

足、高校生の修学旅行など訪れる人も多く、若い人達の歓声が終日こだまして私共の心をなごまし、この団地にも次第になれていった。

ところが十二月初旬、妻が転倒し腰を痛めたためリハビリの専門病院に緊急入院したが、一カ月間の治療や訓練もその効なく、院長から「これ以上リハビリを続けても歩ける見込みはない」と診断され、やむなく退院、以後はまったく寝たきりの状態になってしまった。

こんなわけでその後の私共の平均的日課は、八時起床、九時半頃朝食を済ます

と、晴れた日には車イスに乗せて一時間

程度の散歩、午後一時に昼食、以後掃除洗濯、買物、夕食の準備などをして七時夕食、あと片付けの終る午後九時頃から私の自由時間で、テレビや読書、手紙を書くなどして十二時までは就寝するが夜中の三時前後に一回ムツキの交換をする。また遠方までの買物や各種の集會に参加したり図書館などに出掛けるため、毎週一回、五時間程度ホームヘルパーさん(有料)に留守番も兼ねた家事の手伝いを依頼していた。

五十七年になって横浜市が「寝たきり

老人」の実態調査を行ったとき、ハイツ

の民生委員から私どものことが報告されたが、翌日にはさっそく区役所の福祉課と保健所から職員がきて、妻の病状や家庭の事情などを聴取したり、また国立病院で身体検査を行った結果、身体障害者一級と認定された。

それ以後、私どもの生活内容は大きく変化した。例えば福祉課を通じて毎週三回(現在は月水金)二時間程度、介護人(無料)が来て、病人の世話、家事や夕食の調理などをしてくれるようになったが、この人は同じハイツに住むボランティア

イアなので、緊急の場合、夜間早朝など

でも頼むこともあるし、また保健所からは看護婦さんが週一回(現在木曜)に来て血圧その他の測定、手足のリハ、時には入浴までやってくれ、火曜日のホームヘルパーさんを加えると月曜日から金曜日まで毎日誰かの援助を受けることになった。また土、日曜日には家族の者、特にドリームランドがお目当の孫達がやってくるので、寝たきりの妻と二人でひっそりと暮らしていたあの頃に比べ、まったくのさま替りした現在は「日々是好日」である。△戸塚区在住▽

## ② 地域活動から看護婦への道

森 知子

今から八年前、日本人の女性の平均寿命は約七四歳で、私にとっては半分の折り返し点で後半生の出発点であった。

私が当時サラリーマンだった夫と、三人の子どもを持つ専業主婦から、いくつ

かの動機が絡み合った中で、五年の歳月を経て看護婦の免許を取得し、現在就職している軌跡を振り返ってみようと思う。

### 生いたち

私は横浜生まれの横浜育ちであるが、父は岡山県の旧制中学を中退後、横浜に来て剣道をしたがために警察官をして

生いたち  
地域活動  
転機  
看護婦への道

いたが、終戦でレッドパージにかかり、終戦直後の混乱期に大道で三浦大根を売る露天商から出発して、立ち喰いのうどん屋、水屋、飲み屋、肉屋、惣菜屋、すし屋、食堂、喫茶店等次々に商売換えを

行なっていた。

私はなにより構わず商売に打ち込む父を、友達に対して恥かしいと思うことがなかったとは言えないが、自分を信じて頑固に邁進し、常に創意工夫を凝らす姿に僻易しながらも感心することも多かった。

私の母は静岡県の出身で、高等小学校しか出ていなかったが、非常に努力して准看護婦の免許を取ったが、当時国民病と言われた肺結核に感染して、私が四歳のとき亡くなった。

父はひとり娘の私を抱えて、勤めと育児に追われていたが間もなく再婚し、新しい母は、免許こそ持っていなかったが、京都で眼科の開業医のところまで働いていた人であった。

このことは、私の心がつく以前のことながら、潜在意識として、動機の一つに数えられると思う。

父は口癖のように「働かざる者は食うべからず」と言い、母と二人で朝から晩まで馬車馬のように働いて、私と第一人妹二人と祖母の家族を養っていて、お小遣いには不自由しなかったが、家族の団欒というものを味わったことがなかった。

小学生の頃は、学校が遠浅の海岸に隣接しており、低い山が連っていたので遊びには恵まれていて、お転婆ぶりを發揮

していた。

中学生になってからは、スポーツはバレーボールやソフトボールをしていたが、徹夜で読書をするほど、本が好きになり、将来は大学へ行くつもりであったが、高三の年に若年性胃潰瘍にかかり、進学を断念したのである。

半年後、私は健康を取り戻したが、今度は父が慢性肝炎などに罹り入院したので、国電の桜木町駅前の従業員が三〇人くらいいる店を、一八歳の私が経営することになった。

それは父が復帰するまでの二年足らずの短い期間で、お客さんに喜ばれる商品を考案したりで、商売の面白さや、日銭が毎日入る良さは十分感じた。しかし、商人と結婚して一生続ける気持にはなれなかったのは、大学の土木工学を出て、大手の会社のサラリーマンとなった中学・高校時代の同級生がいたからかもしれない。

### 地域活動

新居が建ち、姑と三人の生活がスタートし、長男が生まれ、二年後長女が生まれた直後に、姑は脳出血で倒れ、家事、育児、看病と過酷な日々だった。幸いなことに、三カ月の入院後は、右半身麻痺が少しみられるだけで、日常生活は介助を殆んど必要としなかっただけでなく、

その後生まれた二男をよく世話してくれていた。

二男は、私の二九歳の時の子どもで、成人式を迎えても四九歳である。日本人の平均寿命は年々大幅に伸びている中で「これからの人生をどのように送ったら良いのだろうか」「何かライフワークのようなものが見つからないだろうか」と、育児期間が終了して、子ども達が自立したあとに思いを馳せ、二男にそれ程手がかからなくなった昭和四十四年頃から、模索の日々が始まった。

その頃、私の住んでいる地域の子供会と健民少年団活動は休止状態だったが、これを再開することにした。子供会活動では、お母さん達の協力が絶大で、活動に必要な資金を調達するために、廃品回収や不用品のバザーを行い、たこ上げ大会、ピクニック、みかん狩り、運動会、アイススケート、もちつきなどの行事を盛大にした。健民少年団では、春の入団式を兼ねたハイキング、夏のキャンプ、冬のスキーを行っていた。

一方、母親学級では書道教室を開いたり、広報ヨコハマにて呼びかけを行ない、古典文学の学習をする婦人学級や、二男が通う幼稚園に家庭教育学級を設けるなど手を拡げるだけ拡げた感がある。母親学級は婦人学級と合併し、二年間の委託のあと、自主学習グループとして

「あじさいグループ」の名称で、十三年目を迎えている。毎月一回なので学習時間は多くはないが、万葉集から始まって、奥の細道、徒然草、平家物語、源氏物語、枕草子、和泉式部選集などを通して、歴史、文化、教育、生活のあり方、心の持ち方など先人に学ぶ所は多く、毎年メンバーは五〇人を超しているので、創設以来三〇〇人以上の仲間が通りすぎって行ったことになる。

人間は本来、教育を受けていなければ、人間としての存在感が希薄になるものであるが、私があじさいグループを主催して来たのは、学びたいという自身の気持のほか、生涯教育の窓口の一つとしてのボランティアでもあったからだ。また、自分で主催しながら次のステップに向けて通りすぎた一人でもあった。

### 転機

姑は、発病以来七年半を経過したが、二度目の脳出血のため突然世を去り、姑に可愛がられた二男も間もなく小学校に入学した。三人の子供は揃って同じ小学生となった頃、別荘地の造成を仕事にしていた夫は、日本列島改造論などのため、仕事も出張も多くなり、わが家で独りだけ取り残された思いを味わっていた。

小学校一年生の社会科で、父の仕事、

母の仕事をお教わった二男は、帰宅すると「うちのお母さんはなんで外で働いていないの？ 僕たちが学校へ行ったらあとは、テレビばかり見ているんでしょ？」と話しかけた言葉を、いまもはっきりと思い出すことができる。

二男は、幼児の時から理屈っぽい子どもではあったが、それほど深く考えて言ったのではないかもしれない。子供会や健民少年団、あじさいグループなどの活動は認めるが、外で仕事をしてお給料を貰い、余暇をそれらの地域活動に費やすべきだと主張したのである。

丁度その頃、小児科医院を開業している高校時代の友人から、暇でしようから手伝いで来て欲しいといわれ、週に一、二回が三、四回になり、しまいには毎日行くようになっていた。これは、患者が多かったのと、毎日行かないと患者を把握しきれないためでもあった。

しかし、毎日手伝っているうちに専門的知識や看護の技術を持たないもどかしさを常に持ち続けていた。

昭和四十九年に横浜市で「福祉の風土づくり」講座をはじめていて、あじさいグループでも委託を受け、定例の古典文学では、別に主として老人福祉の講座を行った。しかし、講義を受けるだけで、何も協力出来ない焦立ちがあり、何か資格を得たいと考えるようになっていた。

一方、三人の子どもたちは、大きな病気や怪我もなく順調に成長、発達して来たが、中でも長男は幼時から天文学に凝っていた。ある時期が来ると、子どもは親を、特に母親を乗り越えて行くものと理解してはいるものの、何一つ専門的知識を持たない私には、太刀打ち出来るはずもなく、そればかりか母親の存在価値が否定されるような錯覚があり、一つでも良いから「これは叶わない」と思わせるものを会得したいと考えていた。

### 看護婦への道

昭和五十年十二月、いままでもボンヤリ見えていたものが、焦点が合わさって来たように、さまざまな動機が明確化され、看護学校の入学願書を集めた。年齢が年齢であること、入試の科目が少なくなくて容易であること、授業料や通学時間などの条件を考えて、横浜市医師会の看護学校准看護学科を受験したが不合格であった。

翌年、再挑戦するため、地域活動はあじさいグループだけに絞り、あとの活動は休止した。

昭和五十二年四月、紺のプレーザーにグレイのスカート、白のYシャツにエンジのネクタイという若々しいスタイルで社会人であり学生であり妻であり母であ

る一人の人間として、誕生したのである。

入学当初は、自分がなぜ教室にいるのか、フト場違いであるような異和感があり順応できたとは言えなかったが、校門をくぐると、学校のことだけに集中できようになり、勉強の方は理解できなくて困るようなこともなかった。

一年間は教室での授業だけで、二年生になって実習のため数カ所の病院へ行っただが、受け入れ側では年齢のことで指導しにくい面もあっただろうし、私の方も、どのように対処して良いか判断に苦勞することが多かったが、何とか乗り切り、卒業試験も無事にクリヤーできて、神奈川県准看護婦の資格を取得した。

以前手伝っていた友人の小児科医との約束で、資格を得たら新しい仕事を二人ですることになっていたため、看護学科へ進学しなかったが、一年経ってみて進学の必要性を痛感し、同じ学校の看護学科に合格し、三年間通学することになった。

看護学科では、一番若い人は一九歳で、私の長男と同じであるが、私より年上の人も居り、准看に較べて平均年齢は高く、結婚して子供の居る人が多く、しかも年齢が同じだったりして休み時間中の話題は豊富だった。

その人たちは、若い頃准看の資格を得得して、ずっと仕事を続けて来た人と、育児で中断して再就職する人と二通りであるが、私の場合は珍らしがられた。

一、二年生の時は、教室での講義が大部分であるが、三年生になると実習があった。二、三歳の女の子四人と私で一つのグループを作り、半年の間教えたり教えられたりした。私は特に実務の経験が少なかったたので、看護技術をよく教えて貰った。

この間、長男は大学受験があり、勉強をほとんどしないタイプであったが、運が良いことに希望する東北大学の原子核工学科に合格できて、仙台で自活している。

私が、三年の最後の卒業試験と、国家試験のための勉強をしている時、長女は短大受験であり、二男は高校受験で、冬休みに帰省した長男は、「この家はおそろしい家だ」といって早々に仙台に戻ってしまったし、夫は自宅でテレビの音を小さくしてみていた。

昭和五十八年二月初旬に、長女は玉川学園短大保育科に合格し、中旬に二男が法政二高に失敗し、三月初旬に東海大学第三高等学校に合格した。二男は、自分の強い意志で長野県茅野市で下宿生活することになった。

子どもは、いつかは自立するものだ

が、幼い頃、兄弟喧嘩をしている二人に向つて、あと何年喧嘩出来るのかしらと思ひ、口にもしたが、こんなに早く自立してしまふとは夢にも想わなかつた。

卒業試験が無事に済み、国家試験は三月六日に池袋の立教大学で、八千人といわれる夥だしい受験生の一人として挑戦した。雰囲気は呑まれ、約二カ月後の発表が気になつた。

卒業試験の前に就職試験があり、私は港南区に新設された済生会南部病院に内定していた。

四月二十二日、朝刊の配達されるのを待っていた。そして新聞紙上に自分の名前を、そしてクラスメイトの名前を見つ

け、九州へ帰っている友人に合格の電話をかけてお互いに祝ひ合った。

開院間近となり、配属先が発表され、私は小児病棟のスタッフの一人として、三交代の勤務が始まつた。小児科は友人のところを経験したが、内科だけでなく外科、整形外科、耳鼻科、皮膚科などあらゆる科があり、しかも年齢は未熟児から一五歳と幅広く、外来勤務と病棟勤務は大きな違いがあり、とまどうことが多かつた。

また、夜勤や準夜勤務で、昼間は覚醒し夜間は睡眠という長年のパターンが反対になり、身体の方がびっくりしているのではないかと思う。しかし、私の場合

は、脱サラで自営業の夫と大学へ通う娘だけで手のかかる人がいない。自分の健康管理に気をつけていればそれで良いのだが、やはり不慣れのために気疲れすることが多い。

昨年七月、横浜市民局の婦人行政推進室で海外セミナーの研修生の募集があり、就職直後なので応募するかしないか迷つたのだが、私の辿つた道を書いて提出した。幸わい一五名の中に入り、九月下旬の二日間、フランスの再就職とオランダの老人福祉を研修する機会に恵まれた。

パリの下町で女性のための出版社の印刷所の研修で自己紹介をした時「テレビ

アンノ あなたは女性の再就職の先駆者である」といわれた。フランスでは子育て終了後、再就職センターや大学で訓練や資格を受けて再就職するケースが非常に増えているからである。

オランダのハーグ市で老人センターを研修したが、建物は住宅地の中にあり、外出、外泊旅行や動植物を飼育することなど、すべてが自由で、人間の老後のあり方を学ぶことが出来た。

帰国した翌日から、内科の循環器病棟に配置換えがあり、新しい勉強が始まつた。  
△済生会南部病院看護婦▽

### ③ 父母の看取りと私

西谷雅子

両親の看取りで退職へ

昨年の三月末、二十九年間勤めた教職

を退き、夫の両親の看取りの生活に入つて早や一年が過ぎようとしている。

今年七四歳になる夫の母が病に倒れた

のは八年前の春であつた。以後入退院をくり返し、今は三度目の入院生活が間もなく三年目を迎えようとしている。肝硬

変と糖尿病によるものである。また、夫の父も五十八年一月末に右足首を骨折して入院、同年五月十五日に退院した。父

両親の看取りで退職へ  
父の退職後の生活を準備  
日々のすこし方  
家庭介護と福祉施策

院